

## 国際協力事業について

岸 保 勘三郎

全地球的規模で立案されてきた第1回地球大気開発計画 (First GARP Global Experiment: 略称 FGGE) の実施は、やっと昨年12月1日から始まった。観測期間は1年間である。この計画の一環として打ち上げられた静止衛星ひまわりも順調に機能を果たしており、大変喜ばしいことである。また、今年5月の特別強化観測期間中には啓風丸 (気象庁) 白鳳丸 (東大海洋研究所) が赤道洋上で観測に参加することになっており、その成果を大いに期待したい。

FGGE の原案が作成されたのは1967年頃であるが、原案の原案という形での討論は1964年頃から始まった。その当時は、ヨーロッパの研究者はアフリカでの観測網の充実のみを強調していた。これに対し、米国のミンツ博士のみは太平洋上で空白域を埋める観測が絶対必要であり、その実施で人類ははかり知れない利益を受けることができると、一人で気炎をあげていたのが印象として残っている。FGGE の原案によれば1973年に実施という計画であったが、気象衛星の技術的開発という問題もあり、最終的には本年の実施ということになった。

FGGE の準備期間中には、気象衛星 (静止・軌道衛星) の技術開発、南半球上で洋上ブイの開発、船舶による赤道上で高層観測をどのように行なうか、といった技術的な問題が前面にでてきたために、一般の研究者は FGGE に直接関わり合うような機会は少なかった。しかし、FGGE が今年1年間にわたって実施されれば全球にわたっての史上初めての膨大なデータが入手できることになる。データは、短期予報に必要な現実的なもの、大気特性を理解するために必要な研究的なもの、気候変動の基礎資料となるようなもの、といろいろの段階に応じて入手できる予定となっている。このようなデ

ータは多分本年後半頃から入手できるようになるが、その段階になって FGGE は研究者にとって初めて身近なものになってくることであろう。学会の長期計画委員会では、これらのデータが研究者にとって入手できやすいように種々検討を始めており、本年は具体案がまとまることを大いに期待したい。また、これらのデータを用いた研究がわが国でも活発に行なわれることを切望する次第である。

FGGE とならんでもう一つの国際協力事業としての中層大気国際観測計画 (Middle Atmosphere Program: 略称 MAP) のことを述べてみたい。MAP の国際協力の実施については、昨年10月の学術会議総会で政府に対し勧告がなされたが、今年中には日本でも具体的な研究計画が推進されることと思う。MAP は、ひと口に言えば、成層圏、中間圏における大気の振舞いを明らかにしようとするものであるが、詳しい事は去年の天気10月号に掲載された「動き出したMAP」(廣田 勇) という解説記事を参照されたい。この計画では、わが国でも成層圏、中間圏の観測技術をどのように開発していくかという課題も含まれており、この面での研究分野の裾野が広がることを大いに期待したい。

以上、二つの国際協力事業についての今後の期待を述べたが、上述の研究観測計画はあくまでもグローバル・スケールのものである。このような大規模現象の観測実施は大変喜ばしいことではあるが、そのために日本の研究者が取り組んできた中・小規模現象の研究観測が過小評価されたり、この分野での研究に停滞があってはならないと思う。たいへん難しい問題ではあるが、あらゆる分野での発展がみられるよう、学会としては十分な配慮をとっていくべきであろう。